

R-GIRO 研究プログラム 進捗・研究成果報告書（第3回）

（2014年10月1日～2015年3月31日分）

（1）基本情報

拠 点 名	年縞を軸とした環太平洋文明研究拠点
拠 点 リ ー ダ ー	文学部・教授 高橋 学
実 施 体 制	第1グループ：「環太平洋地域における人間＝環境関係の人類学的検討」先端総合学術研究科・教授 渡辺 公三 第2グループ：「環太平洋各地の年縞分析による緻密な災害史の構築」衣笠総合研究機構・特別招聘研究教員（教授）安田 喜憲 第3グループ：「環太平洋北部と西部の重層圏としての縄文文化と弥生文化の移行解析」文学部・教授 矢野 健一 第4グループ：「環太平洋における地震・津波災害」文学部・教授 高橋 学

（2）拠点形成の研究成果（拠点全体）

 運営委員会以外には開示しないことを希望する

顕著な研究成果	<ol style="list-style-type: none"> 1. 年縞等の発見：南米コロンビア・グアタビータ湖、韓国・ハノンマールにてボーリング調査をおこない、南米コロンビアでは年縞、ハノンマールでは泥炭質の堆積物の採取に成功した。南米コロンビアの年縞は、およそ500年の堆積環境を保存していると推測できる。今後は分析をおこない、環境変動を復元する予定である。 2. 南米コロンビア・グアタビータ湖の解明：年縞の発見や地質調査により、一見、火口湖状のグアタビータ湖が、火山や隕石の衝突によるものではないことが地質調査で判明した。山体が中生代の砂岩・頁岩によって構成されており、山体の下部に存在した岩塩層の溶出により地層が陥没したものと推定できるデータが、地質調査の結果得られた。 3. シンポジウムの開催：R-GIROとの共催にて、R-GIROシンポジウム「アジアの環境変化と人類」（2014年12月19日、衣笠キャンパス）、さらには、当研究拠点第2回目となる九州・宗像シンポジウム「対馬海峡と古墳文化」（12月22・23日、宗像市）を開催し、研究成果を広く一般に発信した。
主な研究成果 （3件以内）	<ol style="list-style-type: none"> 1. 環太平洋文明叢書1「津軽海峡圏の縄文文化」（雄山閣、217p）を刊行した。 2. 日本における1923年以降の地震データベースが完成した。（現在、分析中。） 3. 東京都災害避難地図の危険度評価などの研究の一端を、テレビ（フジテレビ「Mr.サンデー」他）や新聞などで報告した。
若手研究者の 育成結果	<ol style="list-style-type: none"> 1. 富田 敬大：論文（1報）、図書（0報）学会・研究会発表（4件）、講演会発表（1件） 2. 篠塚 良嗣：論文（0報）、図書（1報）学会・研究会発表（1件）、講演会発表（1件） 3. 中村 大：論文（4報）、図書（1報）学会・研究会発表（4件）、講演会発表（3件）
大型国家プロジ ェクトの採択 結果	<ol style="list-style-type: none"> 1. 二国間交流事業共同研究 総額2,400千円 不採択 2. 科学研究費助成事業新学術研究（研究領域提案型） 総額902,565千円 不採択 3. 科学研究費助成事業基盤研究（B）（一般） 総額19,382千円 申請中 4. 科学研究費助成事業基盤研究（C）（一般） 総額5,000千円 申請中 5. 科学研究費助成事業基盤研究（C）（一般） 総額4,947千円 申請中 6. 科学研究費助成事業若手研究（B） 総額3,397千円 申請中
拠点形成の取組 みの課題	南米コロンビア・グアタビータ湖、韓国・ハノンマールにて調査をおこない、新たに年縞が発見されたり、地質調査により環境変化が明らかになったりし、北半球中緯度と南米赤道付近のデータが充実するなど、研究が充実してきたが、資金が不足している。

(3) 研究進捗の状況 (グループ別)

① 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第 1 グループ	環太平洋地域における人間＝環境関係の人類学的検討
メンバー (所属)	GL: 渡辺 公三 (先端総合学術研究科・教授) TL: 小川 さやか (先端総合学術研究科・准教授)、原 毅彦 (国際関係学部・教授) 拠点研究員: 森下 直紀 (和光大学・講師)、近藤 宏 (国立民族学博物館・外来研究員)、石田 智恵 (日本学術振興会・特別研究員) 専任研究員: 富田 敬大 (R-GIRO・専門研究員) 博士後期課程院生: モリ カイネイ (先端総合学術研究科)、梁 説 (先端総合学術研究科)、岩田 京子 (先端総合学術研究科)
研究実施場所	衣笠キャンパス修学館プロジェクト研究室 220、他
内 容	<p><u>①研究の進捗状況</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 環太平洋地域における人間＝環境関係をめぐって、各メンバーがこれまでに実施してきた調査・研究の進捗状況についての検討会を、10月30日に実施した。各人の調査・研究に対して意見交換をおこなうとともに、今後の研究の方向性について議論した。 渡辺は、2014年8月にカナダ・トロント近郊のイロクオイ連合のリザーションでおこなった環境保全の現状についての調査成果にもとづいて、アメリカ先住民が強制移住先の居留地で環境との関わりをいかに復元してきたのかについて検討を進めた。 森下は、3月6日から12日にかけて、オタワのカナダ図書・公文書館およびオタワ中央図書館を訪問し、カナダ水俣病事件に関する文献資料の渉猟をおこなった。カナダ中央図書館では、1970年代のカナダ政府による水銀被害の報告書を精査した。カナダ図書・公文書館では、水銀被害を報じた新聞・雑誌記事、カナダ政府・オンタリオ州政府の議会記録、支援団体、支援活動に関する資料の収集をおこなった。 富田は、3月21日から29日かけて、モンゴルに滞在し、エルデネト近郊のボルガン県オルホン郡における集団化期の牧畜活動と環境利用の関わりについて現地調査を実施した。これまでにボルガン県庁公文書室で収集した行政文書・統計資料を分析した結果明らかになった情報を、調査地の人びとの口述史とつぎ合わせて検討した。また、研究成果の一部を、12月19日のR-GIROシンポジウムで報告した。 <p><u>②拠点形成に向けた取組み状況</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターにおいて、地域コンソーシアム (JCAS) 20年度次世代ワークショップ「近現代モンゴルにおける人間＝環境関係の変容」を開催した (1月11日)。シンポジウムでは、農牧業集団化とそれに伴う社会変化が、近代化以前の人間＝環境関係に及ぼした影響について、人類学や歴史学、土壌学など多方面から議論するとともに、今後、文理融合の共同研究プロジェクトに発展させるための連携体制の構築および外部資金の獲得を進めていくことを確認した。 <p><u>③若手研究者の育成状況</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 富田は、本年度獲得した外部資金2件 (高梨学術奨励基金若手研究助成「近現代モンゴルにおける人間＝環境関係の変容に関する研究」、三島海雲記念財団学術研究奨励基金「モンゴル都市周辺地域における家畜預託の実態とその変容についての歴史人類学的研究」) に関する調査・研究を実施するとともに、その成果を国内外の学会・シンポジウム、研究会等において積極的に発表 (2014年10月, ハンガリー・ブダペスト、2014年12月, 衣笠キャンパス、2015年1月, 北海道大学、2015年3月, 東北大学)、投稿 (“Development Policy and Social Changes in a Suburban area of Mongolia: Application of the DiMSIS-EX to an Anthropological Research”, 2014) をおこな

	<p>った。</p> <p>2. また、現地調査や研究発表を通し、グループ内の若手研究者の育成にも取り組んでおり、モリは、1月に台湾を訪問し、華人キリスト教者に関わる調査を実施した。</p>
--	---

② 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第 2 グループ	環太平洋各地の年縞分析による緻密な災害史の構築
メンバー (所属)	GL・TL：安田 喜憲（衣笠総合研究機構・特別招聘研究教員（教授））TL：外山 秀一（皇學館大学・教授）拠点研究員：山田 和芳（ふじのくに地球環境史ミュージアム・准教授）、藤木 利之（岡山理科大学・講師）、森 勇一（金城学院大学・講師）、那須 浩郎（総合研究大学院大学・助教）、北川 淳子（福井県里山里海湖研究所・主任研究員）、野嶋 洋子（国際日本文化研究センター・プロジェクト研究員）、Xun Li（ニュージーランド・GNS Science Researcher）専任研究員：篠塚 良嗣（R-GIRO・専門研究員） 博士後期課程院生：福本 侑（九州大学大学院理学院）
研究実施場所	衣笠キャンパス修学館プロジェクト研究室 234、各研究機関（大学）、他
内 容	<p><u>①研究の進捗状況</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 2014年3月1・2日に開催された函館シンポジウム「環太平洋の文明拠点：津軽海峡圏の縄文文化」の報告書として、環太平洋文明叢書 1「津軽海峡圏の縄文文化」（安田喜憲・阿部千春編）を出版した。 2015年3月に安田と山田と篠塚、第4グループの高橋の4名は、南米コロンビア・グアタビータ湖においてボーリング調査をおこなった。重力式のコアサンプラー（リミノス）を用いて、約30cm程度のコアの採取を複数地点でおこなった。年縞が確認でき、堆積速度1mm/年とした場合、およそ300年間の堆積環境を保存していると推測できる。今後分析をおこない、環境変動を復元する予定である。南米大陸の沈み込み帯に位置するコロンビアでは災害が頻発しているため、コロンビアの災害履歴などが復元できると期待できる。 2015年3月に北川と篠塚の2名は、韓国・ソキポにあるハノンマールという湿地と、榛名山中腹にある湿原において、ロシア式の人力で行うピートコアサンプラーを用いてボーリング調査を行った。ハノンマールでは約5mのコアを採取し、榛名山中腹では約3mのコアを採取した。今後花粉分析と化学分析、さらに韓国の研究者と連携し、環境変動を復元する予定である。 環太平洋各地の年縞分析について、現状保有しているグアテマラ、ペルーなど中南米の湖沼や秋田県一の目潟や小川原湖で採取されたサンプルの分析も進めている。 <p><u>②拠点形成に向けた取組み</u></p> <ol style="list-style-type: none"> 南米コロンビアのロスアンデス大学と、立命館大学とで研究協定を結び、研究上の交流などをおこなう。また、今後、山田が所属するふじのくに地球環境史ミュージアムとコロンビアの大学との間でも協定を結ぶ予定であり、3者で研究交流がおこなわれることになる。コロンビアでは日本のように地震などの災害が頻発している（調査中にも震度3の地震があった）。そのため、両国で連携して災害を含む環境変動を復元する研究は非常に意義がある。 環太平洋文明叢書シリーズの第1弾として、今回『津軽海峡圏の縄文文化』を出版した。今後、年に2冊程度の頻度で叢書を出版し、当研究拠点の活動を一般の人達に広く普及

	<p>する取り組みをおこなっていく。</p> <p>3. 2014年12月19日にはR-GIROとの共催でR-GIROシンポジウム「アジアの環境変化と人類」、2014年12月22・23日には九州・宗像シンポジウム「対馬海峡と古墳文化」を開催した。ともに一般の人たちが100名程度集まり、盛況であった。九州・宗像シンポジウムの報告書も環太平洋環境叢書として出版予定である。この夏には、佐賀県において当研究拠点第3回目となるシンポジウムを開催する予定である。</p> <p>③若手研究者の育成状況</p> <p>1. グループ内の若手研究者による年縞研究・分析は順調に進められている。</p> <p>篠塚は、韓国とコロンビアの調査に参加し、湖上からピートコアサンプラーを用いて、陸上から重力式コアサンプラーを用いてコアリング調査をおこない、そして現地研究者と研究の進め方などについて積極的に意見を交わしている。また、R-GIROとの共催であるシンポジウム「アジアの環境変動と人類」にて「年縞から読み取る災害が文明興亡にあたえた影響」と題し、当研究センターの活動について発表をおこなっている。また、環太平洋文明叢書1「津軽海峡圏の縄文文化」安田喜憲・阿部千春編にて、分担執筆をおこなった。(篠塚良嗣、山田和芳, 「年縞による縄文時代における気候変動」, p49-68)</p>
--	--

③ 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第3グループ	環太平洋北部と西部の重層圏としての縄文文化と弥生文化の移行解析
メンバー (所属)	GL・TL: 矢野 健一 (文学部・教授) TL: 千葉 豊 (京都大学文化財総合研究センター・准教授) 拠点研究員: 丸山 真史 (京都市埋蔵文化財研究所・所員)、大野 薫 (大阪府立狭山池博物館・嘱託)、中塚 良 (公益財団法人向日市埋蔵文化財センター・主任)、松森 智彦 (同志社大学高等研究教育機構・特別任用助教)、佐々木 尚子 (京都府立大学・共同研究員)、上峯 篤史 (学術振興会・特別研究員)、木村 浩章 (学術振興会・特別研究員) 専任研究員: 中村 大 (R-GIRO・専門研究員) 博士後期課程院生: 原田 昌浩 (文学研究科)
研究実施場所	衣笠キャンパス啓明館考古学・文化遺産共同研究室、琵琶湖
内容	<p>①研究の進捗状況</p> <p>1. 研究課題1「縄文文化の起源と終焉を中心とするGISデータベース構築の試行的研究」: 中村は、縄文遺跡データベースの構築を継続しておこなった。作業対象となる関西縄文文化研究会刊行の資料集の全23冊(約8500頁、掲載遺跡数約3200ヶ所)は、住居・墓など約5800基の遺構、1万点を超える石器類、300種類を超える動植物遺存体など膨大なデータが記載されている。データベース構築の第1段階の作業として、紙媒体からデジタルデータへの変換作業を実施した。スキャンしたデータをPDF化し、それをOCR(文字認識)ソフトを利用しテキストデータ化する方法と、手入力を使い分け、効率的に作業が進むよう配慮した。居住・生業・葬祭に関連する遺構のテキストデータ化を終了し、石器や土器など遺物に関するテキストデータの入力を進めた。これまで全体の約三分の二にあたる約6000頁分について、2回の校正作業を経て文章と表のテキストデータ化が終了している。今後は、動植物遺存体・災害痕跡などを追加し、内容の充実に努める。</p> <p>また、データベースの活用推進を図るため、データベースをテーマとした関西縄文研究会第15回研究大会を2014年12月6・7日に福井県立若狭歴史博物館(福井県小浜市)</p>

で開催し、活用事例の報告をもとに本データベースに必要とされる情報の精度や公開方法などに関する議論を深めた。矢野・中村・松森・上峯・大野が研究発表をおこなった。中村は、北海道伊達市（2012年10月）、岐阜県飛騨市（2014年11月）、石川県金沢市（2014年12月）、福岡県福岡市（2015年2月）など各地の研究会に参加し、最新データの収集とともに公開と活用に関する意見交換もおこない、データベースを中核とした研究連携の準備作業も進めた。

さらに、データベースおよび解析技術の人類史研究における汎用性を向上させるため、中村と松森は、近世文書のデータベース化作業にも協力し、成果を論文として発表した。グローバルな公開も視野に入れ、英国ヨーク大学やスペインのバルセロナ大学の研究者をはじめ海外の研究者とも情報交換をおこない、データベースのグローバルな活用に向けての準備作業も進めた。

2. 研究課題2：「集落立地変化と災害との関係の把握」：

矢野は、2015年2月4日から9日に京都府向日市竹岡子地先で深度15mのボーリング調査を実施し、土壌コア資料を得た。これは2014年7月5・6日に日本文化財科学会第31回で発表した深度29mの向日市寺戸川縦坑の隣接地点における土壌サンプル分析の追加調査で、連続した堆積層の確認を目的とし、その点は成功した。寺戸川縦坑では深度5-10mで紀元前3800年頃の大規模土砂堆積層の直下に紀元前5万年頃のシルト層の厚い堆積を確認しており、今回の両者の層理的関係の詳細を把握することを期待している。3月14日から拠点研究員・中塚良らと土壌コアの基礎的調査を開始している。

立命館大学が2011年度・2012年度に発掘調査した滋賀県米原市杉沢遺跡においては、縄文時代晩期（紀元前900年頃）の大規模な土砂堆積層が確認されており、その分析結果について2013年5月25・26日の日本考古学協会第79回（2013年度）総会・研究発表会にて拠点研究員上峯篤史らが発表しているが、矢野は、この杉沢遺跡の正式発掘調査報告書の作成作業を実施し、2015年3月31日刊行予定である。

また、鳥取県鳥取市青島遺跡（縄文時代中期・後期）、兵庫県養父市熊野円山遺跡（縄文時代早期）、同県香美町和地大澤遺跡（縄文時代早期）についての報告書作成作業をおこなった。いずれも2015年度前半に刊行できる見通しである。

矢野は、兵庫県伊丹市口酒井遺跡（縄文時代晩期）の集落立地変化を分析し、2015年2月17日に概要を講演で発表した。この分析結果を含めた縄文時代から弥生時代にかけての集落立地変化について、2015年度に論文として公表する予定である。

工学部川村貞夫氏と共同ですすめている葛籠尾崎湖底遺跡調査は、3月10日調査実施を予定していたが、天候不順のため、残念ながら中止した。来年度の科学研究費を申請しており、当拠点メンバーである河角龍典氏も共同研究者に加わっていただき、地理学的調査を担当していただく予定である。

この他、矢野は、縄文時代の編み物研究の第一人者である尾関清子氏（東海女子短期大学・名誉教授）から環太平洋文明研究センターに寄贈していただいた縄文時代の編み物関係の資料整理を進め、その成果を「考古学・人類学からみた布と編みカゴ」と題し、研究会で発表した（2014年12月20日、衣笠キャンパス）。この研究会では、尾関清子氏、眞邊彩氏（鹿児島県埋蔵文化財研究センター）、東村純子氏（福井大学）、渡辺公三氏（先端総合学術研究科・教授）を招聘し、編み物研究に関する研究成果の発表をおこなっていただいた。この中で矢野は、「体験教室 道具を使わずに縄文の布を編もう」と題し、ワークショップを実施した。編み物研究は縄文時代の衣服と関係し、この問題

は環境変化と深く関わるので、当初の計画にはないテーマであるが、今後も、国際的視点を加味して継続させる予定である。

②拠点形成に向けた取組み状況

1. 縄文遺跡データベース構築のために、独立法人文化財研究所奈良文化財研究所の遺跡データベースデータを複写・利用する許可を得ることができた。遺跡の基本情報を両データベース間で共有し、データベース連携を進めている。また、山陰地方や九州北部の地域データベースとの研究協力にも着手している。今後は海外との連携も推進し、国際的に認知される先駆的なデータベース活用事例の構築めざす。研究者の協力体制を充実させる。年縞を軸とした古環境研究の成果を人口動態など歴史的背景の中に位置づけるためには、遺跡データベースの充実は必要不可欠である。矢野は、韓国のソウル国立大学校金壯錫副教授と平成 27 年度日本学術振興会の韓国との共同研究（NRF）に応募した。申請課題は「東アジア先史時代における人口動態の考古学的復元」で、遺跡データベースを利用するものであり、中村は研究参加者の 1 人としている。残念ながら、不採択となったが、次年度も申請する予定である。中村は平成 27 年度科学研究費基盤研究（C）に「マルチスケールな GIS 分析と統計解析を用いた縄文時代の墓制研究」を応募し、データベースの活用を軸とする研究の準備を進めている。
2. 縄文時代を中心とする集落立地変化と災害との関係の把握のために、向日市ボーリングコア調査に関する研究会を継続させている。葛籠尾崎湖底遺跡調査のために、本学「研究高度化推進制度研究推進プログラム科研費連動型」の研究助成を受け、「ロボットを利用した水中遺跡探査法の開発とこれに伴う調査」をおこなっており、同じ研究課題で 2015 年度の科研費基盤研究（B）を申請している。尾関清子氏寄贈の縄文時代編み物関連資料の研究を進めるために、2015 年度から眞邊彩氏（鹿児島県埋蔵文化財研究センター）・東村純子氏（福井大学）に本拠点の客員研究員に加わっていただくことになっている。

③若手研究者の育成状況

1. 中村は、各地の研究会に参加しデータベース作成に関連する有益な情報を収集するとともに、公開と活用方法について広く研究者から意見を聞く機会を設けている（2014 年 10 月、北海道伊達市、2014 年 11 月、岐阜県飛騨市、2014 年 12 月、石川県金沢市、2015 年 2 月、福岡県福岡市）。
2. 中村は、データベース構築およびその予備的解析の成果について、2014 年 12 月の関西縄文研究会第 15 回研究大会（福井県小浜市）と 12 月 19 日の R-GIRO シンポジウム「アジアの環境変化と人類」（衣笠キャンパス）にて発表をおこなった。また、2015 年 1 月には第 255 回近江貝塚研究会で考古資料データベースの解析技術に関する発表をおこなった。
3. 中村は原著論文 4 本を発表し、研究成果の公開を積極的に進めた。それとともに、山口大学の近世文書資料のデータベース化と GIS 分析にも参画しデータベース構築と活用の技術力向上に努め、その成果も論文にまとめた。（『防長風土注進案』記載の魚類と村落：系統樹による村落の階層化と特徴的魚類の検出、2015、「『防長風土注進案』の村別地図データ作成」、2015、「GIS による墓地分析－縄文晩期の東北北部を例に－」、2015、「『防長風土注進案』の産物記載にみる食品目録（2）－魚介類・海藻類を中心に－」、2015）

④ 運営委員会以外には開示しないことを希望する

第 4 グループ	環太平洋における地震・津波災害
メンバー (所属)	GL：高橋 学（文学部・教授） TL：河角 龍典（文学部・教授） 博士後期課程院生：谷端 郷（文学研究科）
研究実施場所	衣笠キャンパス地理学 GIS 写真測量室、製図室
内 容	<p>①研究の進捗状況</p> <ol style="list-style-type: none"> 南米コロンビア・グアタビータ湖での年縞の発見や地質調査により、一見、火口湖状のグアタビータ湖が、火山や隕石の衝突によるものではないことが地質調査で判明した。山体が中生代の砂岩・頁岩によって構成されており、山体の下部に存在した岩塩層の溶出により地層が陥没したものと推定できるデータが地質調査の結果得られた。 1985年にネバドデルルイス火山の噴火にともなう融雪氷土石流により人口25000人のうち21000人が犠牲になった「悲劇の街アルメロ」の第2次調査を実施した。これにより、被災以前のアルメロの景観や都市機能についての復原が可能になった。 1923年以降における日本の震度1以上の地震についてデータベース化が進んでおり、現在そのデータを分析中である。その中で、地震発生に一定の法則（くせ）があることが2点明らかになった。 大正関東大震災により、地震に対して安全であるとされてきた山の手地区が意外に被災しやすい状況にあることが明らかになった。すなわち、大正関東大震災時には山の手地域の人口密度が下町地域に比べ著しく低かったことで、「被災しにくいように」見えたにすぎない。山の手地域を被覆する「関東ローム層」は、地耐力が沖積層中部粘土層なみに低く慢性的な地滑りを起こしている。また、首都高速環状8号線の内側、特に環状7号線の内側では、区画整理以前に都市化したために、道路整備が不十分で、家屋も老朽化し、現在、老人の一人暮らしが目立つ。その点で、今後、首都直下地震のなどの場合の対策を講じる必要がある。 東京都が作成した災害避難地図を検討した結果、半分以上の避難場所がむしろ逃げると危険な地域であることが明らかになった。また、避難場所に通じる道路整備がなされておらず、家屋倒壊の影響などで、実際には利用できないことも明らかになった。 <p>②拠点形成に向けた取組み状況</p> <ol style="list-style-type: none"> 南米コロンビアにおいて、日本大使館などの援助を受け、コロンビア政府環境省やロスアンデス大学との間で、調査協定を締結した。 模型ヘリコプターを利用した空中写真撮影により、地図の作成が可能になった。また、洪水シミュレーションシステムの開発を行っている。 「(仮)環太平洋学部」もしくは、「環太平洋文明研究所」の設立に向けた検討を始めた。 <p>③若手研究者の育成状況</p> <ol style="list-style-type: none"> 谷端は、学位論文を年度末に提出するべく、現在、事前プレゼンテーションまで終了した。

① 雑誌論文 (査読あり)

<第1グループ>

1. 岩田京子, 「1930年代の京都における風致林保全の学知の動態」, 『社叢学研究』, NPO 法人社叢学会, 13号, pp. 22~31, (2015)
2. 岩田京子, 「風景思想の転換に参与したローカリエリート—小林吉明による京都市郊外の風致保全・保勝事業を事例に」, 『Core Ethics』, 立命館大学大学院先端総合学術研究科, 11号, pp. 1~11, (2015)
3. モリカイネイ, 「華人プロテスタント信者の越境的連結: 「中国信徒布道会」をめぐり—考察」, 『Core Ethics』, 立命館大学大学院先端総合学術研究科, 11号, pp. 171~182, (2015)

<第3グループ>

4. 松森智彦・中村大・五島淑子, 「『防長風土注進案』記載の魚類と村落: 系統樹による村落の階層化と特徴的魚類の検出」, 『じんもんこん 2014 論文集』, 情報処理学会, 2014年3号, pp. 169~176, (2015)

② 雑誌論文 (査読なし)

<第1グループ>

1. 小川さやか, 「グローバルな消費のモードと接続するローカルな生産・流通モード」, 『民博通信』, 国立民族学博物館, 146号, pp. 22~23, (2014)
2. 小川さやか, 「動く人 都市の不確実性に身をゆだねる」, 『at プラス』, 太田出版, 22号, pp. 50~69, (2014)
3. 小川さやか, 「第3章タンザニアにおける衣料品の消費行動に関する考察—中古衣料品と中国・東南アジア製衣料品の供給システムの違いに着目して」, 小島道一編 『国際リユースと発展途上国』, アジア経済研究所, pp. 36~61, (2014)
4. 小川さやか, 「Living for Today の人類学第1回 「わたしたちは「怠け者」に憧れている?」」, 『小説宝石』, 光文社, 1号, pp. 76~83, (2014)
5. 小川さやか, 「Living for Today の人類学第2回 「最小限の努力で生きる「情の経済」社会」」, 『小説宝石』, 光文社, 2号, pp. 100~107, (2015)
6. 小川さやか, 「Living for Today の人類学第3回 「タンザニア都市住民の予定表のない生き方」」, 『小説宝石』, 光文社, 3号, pp. 76~83, (2015)
7. 小川さやか, 「Living for Today の人類学第4回 「中国とアフリカにみる「下からのグローバル化」」, 『小説宝石』, 光文社, 4号, pp. 100~107, (2015)
8. Takahiro Tomita, Shigeru Kakumoto, “Development Policy and Social Changes in a Suburban area of Mongolia: Application of the DiMSIS-EX to an Anthropological Research”, *New Trend in Ottoman Studies*, Marinos SARIYANNIS (eds), University of Crete, pp. 930~943, (2014)
9. 梁説, 「京都市東九条地域に見る民衆文化ダイナミズム—東九条マダンからの「マダン劇」再考」, 『公益財団法人大学コンソーシアム京都 都市政策研究助成研究報告論文集』, 公益財団法人大学コンソーシアム京都, pp. 5~54, (2015)

<第3グループ>

10. 中村大, 「『防長風土注進案』の村別地図データ作成」, 『山口大学教育学部研究論叢』, 山口大学教育学部, 64巻第1部, pp. 73~82, (2015)
11. 中村大, 「GISによる墓地分析—縄文晩期の東北北部を例に—」, 『季刊考古学』, 雄山閣, 第130号, pp. 76~78, (2015)
12. 松森智彦・山根麻希・中村大・五島淑子, 「『防長風土注進案』の産物記載にみる食品目録(2) —魚介類・海藻類を中心に—」, 『山口大学教育学部研究論叢』, 山口大学教育学部, 64巻第1部, pp. 83~96, (2015)

(2015)

③ 図書

<第1グループ>

1. Kainei Mori, "Overseas Chinese Protestant Churches in Japan: Changes as witnessed from their Stance toward Christian Mission Activities", After Migration and Religious Affiliation: Religions, Chinese Identities and Transnational Networks, World Scientific, pp.241~272, (2014)
2. 渡辺公三, 「人類学的思考の戦場 (バトルフィールド)」, 真島一郎・川村伸秀編『山口昌男 人類学的思考の沃野』, 東京外国語大学出版会, pp. 40~46p. (2014)

<第2グループ>

3. 安田喜憲・阿部千春編『津軽海峡圏の縄文文化』, 雄山閣. (2015)
4. 篠塚良嗣・山田和芳, 「年縞による縄文時代における気候変動」, 安田喜憲・阿部千春編『津軽海峡圏の縄文文化』, 雄山閣, 49~68p. (2015)

<第3グループ>

5. 矢野健一, 「日本列島に展開した縄文文化と文化領域—その課題」, 安田喜憲・阿部千春編『津軽海峡圏の縄文文化』, 雄山閣, p36~48, (2015)
6. 中村大, 「数字で読みとく土偶と環状列石—定量的分析の可能性—」, 安田喜憲・阿部千春編『津軽海峡圏の縄文文化』, 雄山閣, p127~146, (2015)

(5) 学会発表 運営委員会以外には開示しないことを希望する

① 海外での発表

<第1グループ>

1. TOMITA, Takahiro, "Animal Classification and Recognition by Pastoralists: A Comparative Analysis of Turkey and Mongolia," the 21th Symposium of the International Committee of Pre-Ottoman and Ottoman Studies, Budapest, Hungarian academy of sciences, 2014年10月8日

② 国内での発表

<第1グループ>

1. 森下直紀, 「北米環境と流域管理—流域管理と自然保護地域の関係について」, 環太平洋文明研究センター第6回定例研究会, 衣笠キャンパス, 2014年10月31日
2. 富田敬大, 「モンゴル牧畜社会と環境との関わり」, R-GIRO シンポジウム「アジアの環境変化と人類」, 衣笠キャンパス, 2014年12月19日
3. 渡辺公三, 「パネルディスカッション—環境・災害・人類を知るための多分野共同研究—」, R-GIRO シンポジウム「アジアの環境変化と人類」, 衣笠キャンパス, 2014年12月19日
4. 富田敬大, 「モンゴル国北部地域における集団化と土地利用—ボルガン県の事例をもとに」, 地域研究コンソーシアム次世代WS『近現代モンゴルにおける人間=環境関係の変容』, 札幌市北区・北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター, 2015年1月11日
5. 富田敬大, 「移行経済下の都市周辺地域における牧畜経営の実態とその特徴—乳・乳製品生産に着目して」, シンポジウム「畜産物の流通にみるモンゴル高原のグローバリゼーション」, 宮城県仙台市・東北大学東北アジア研究センター, 2015年3月7日

<第2グループ>

6. 藤木利之, 長崎湾飽の浦沖ボーリングコアの化石花粉群集からみた完新世の古植生変遷, 日本花粉学会, 第55回大会, 札幌市北区・北海道大学, 2014年9月13日

7. 篠塚良嗣, 「年縞から読み取る災害が文明興亡に与えた影響」, R-GIRO シンポジウム「アジアの環境変化と人類」, 衣笠キャンパス, 2014年12月19日
8. 安田喜憲, 「古墳寒冷期と古墳文化の展開」, 九州・宗像シンポジウム「対馬海峡と古墳文化」, 福岡県宗像市・海の道むなかた館, 2014年12月23日

<第3グループ>

9. 松森智彦, 「ゾーン集計を用いた遺跡立地の定量的分析 —富山県の縄文遺跡を対象に—」, 第15回関西縄文文化研究会研究集会 縄文遺跡データベースの作成と利用, 福井県小浜市・福井県立若狭歴史博物館, 2014年12月6日
10. 中村大・矢野健一, 「縄文遺跡データベース作成中間報告」, 関西縄文文化研究会, 第15回関西縄文文化研究会研究集会 縄文遺跡データベースの作成と利用, 福井県小浜市・福井県立若狭歴史博物館, 2014年12月6日
11. 上峯篤史, 「『日本列島の旧石器時代遺跡』データベースの活用」, 関西縄文文化研究会, 第15回関西縄文文化研究会研究集会 縄文遺跡データベースの作成と利用, 福井県小浜市・福井県立若狭歴史博物館, 2014年12月7日
12. 大野薫, 「歴博士偶データベースの概要と課題」, 関西縄文文化研究会, 第15回関西縄文文化研究会研究集会 縄文遺跡データベースの作成と利用, 福井県小浜市・福井県立若狭歴史博物館, 2014年12月7日
13. 松森智彦・中村大・五島淑子, 「ポスター発表『防長風土注進案』記載の魚類と村落: 系統樹による村落の階層化と特徴的魚類の検出」, 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん2014」オープン化するヒューマニティーズ ~ その可能性と課題を考える ~, 情報処理学会, 東京都千代田区・国立情報学研究所一橋講堂, 2014年12月13日・14日
14. 中村大, 「環境変化が人口変動に与えた影響: 遺跡データベースの作成から」, R-GIRO シンポジウム「アジアの環境変化と人類」, 衣笠キャンパス, 2014年12月19日
15. 矢野健一, 「パネルディスカッション—環境・災害・人類を知るための多分野共同研究—」, R-GIRO シンポジウム「アジアの環境変化と人類」, 衣笠キャンパス, 2014年12月19日
16. 松森智彦, 「近世村落の産物構成と立地・近接関係の比較 —『防長風土注進案』記載の農作物および採集品を対象に—」, 人文系データベース協議会, 第20回公開シンポジウム「人文科学とデータベース」, 大阪府東大阪市・近畿大学東大阪キャンパス, 2014年12月20日
17. 矢野健一, 「パネルディスカッション「古墳時代の北部九州～アジアとどのような交流をしていたのか」」, 九州・宗像シンポジウム「対馬海峡と古墳文化」, 福岡県宗像市・海の道むなかた館, 2014年12月23日
18. 中村大, 「縄文時代の墓にみられる格差はいかに理解可能か?」, 近江貝塚研究会, 第255回 燃える社会の複雑化, 滋賀県大津市・滋賀県埋蔵文化財センター, 2015年1月30日

<第4グループ>

19. 高橋学, 「パネルディスカッション—環境・災害・人類を知るための多分野共同研究—」, R-GIRO シンポジウム「アジアの環境変化と人類」, 衣笠キャンパス, 2014年12月19日

(6) 省庁、学会、財団などの表彰 運営委員会以外には開示しないことを希望する

なし

(7) 外部資金獲得（競争的研究費、共同研究、受託研究、奨学寄附金等）

運営委員会以外には開示しないことを希望する

なし

(8) 特許 運営委員会以外には開示しないことを希望する

① 出願

なし

② 取得

なし

(9) その他（報道発表、講演会等） 運営委員会以外には開示しないことを希望する

① 報道発表

1. 高橋学, 「日本最悪のシナリオ徹底討論スペシャル！」たかじんのそこまで言って委員会 よみうりテレビ, 2014年10月12日
2. 高橋学, 「火山列島ニッポン 緊急検証 SP」ビートたけしのTVタックル テレビ朝日, 2014年10月13日
3. 北川淳子, 「誘客へ嶺南の魅力実感」福井新聞, 2014年11月27日
4. 北川淳子, 「北潟湖堆積物を採取」県民福井新聞, 2014年12月9日
5. 北川淳子, 「湖底堆積物の初調査」中日新聞, 2014年12月11日
6. 森下直紀, 「『水俣病解決策、現場に学んで』和光大・森下さんが講義」熊本日日新聞, 2015年1月9日
7. 高橋学, 「震災から4年…「東日本」の火山で“大噴火”迫ると専門家警告」日刊ゲンダイ, 2015年1月9日
8. 北川淳子, 「「年縞」を研究/地域密着の教育活動も」電気新聞, 2015年2月12日
9. 高橋学, 「南海トラフ地震秒読みか 関西一帯で続く“異変”に専門家警告」日刊ゲンダイ, 2015年2月17日
10. 高橋学, 「地震予測スペシャル～巨大地震から命を守れ！」Mr. サンデー フジテレビ, 2015年3月8日

② 講演会等

1. 中村大, 「縄文を語ろう」, フォーラム第1回「縄文大好き集まれ！」, 札幌市中央区・現代芸術 gallery CA102, 2014年10月4日
2. 矢野健一, 「縄文時代研究の現状と課題」, 日曜連続講座 平成版日本考古学の現状と課題, 大阪府堺市・堺市博物館, 2014年10月5日
3. 小川さやか, 「もう一つのチャイニーズドリーム」, 第10回 MUCL 講演会, 千葉市・神田外語大学, 2014年10月10日
4. 篠塚良嗣, 「湖沼年縞堆積物を用いた無機分析に基づく環境史復元」, 第16回ライスボールセミナー, 衣笠キャンパス, 2014年10月14日

5. 中村大, 「考古学とデータベース 数字で読み解く縄文時代」, 第18回ライスボールセミナー, 衣笠キャンパス, 2014年10月28日
6. 富田敬大, 「モンゴル遊牧民と自然環境のかかわり—近現代における社会経済変動と環境変化」, 第19回ライスボールセミナー, 衣笠キャンパス, 2014年11月4日
7. 森下直紀, 「入会地とコモンズ」, 映画を通じて問いなおす「記憶」の形成」プロジェクト・映画『こつなぎ山を巡る百年物語』上映会, 衣笠キャンパス, 2014年11月16日
8. 小川さやか, 「タンザニアのたくましい路上商人」, 高大連携事業, 京都堀川高校, 2014年12月17日
9. 渡辺公三, 「布の人類学—中央アフリカ、クバ王国ラフィア染織を手掛かりに」, 考古学・人類学からみた布と編みカゴ, 衣笠キャンパス, 2014年12月20日
10. 矢野健一, 「体験教室 道具を使わずに縄文の布を編もう」, 考古学・人類学からみた布と編みカゴ, 衣笠キャンパス, 2014年12月20日
11. 森下直紀, 水俣学講義「水とコモンズ—水源管理としての米国国立公園・国有林」, 熊本市・熊本学園大学, 2015年1月8日
12. 矢野健一, 「縄文人はなぜ稲作を始めたのか?」 市民歴史大学「縄文から弥生へ」, 大阪府柏原市・柏原市歴史資料館, 2015年1月17日
13. 矢野健一, 「口酒井遺跡からみる縄文から弥生へ」, 第20回文化財ボランティア養成講座(第4回), 兵庫県伊丹市・伊丹市立中央公民館, 2015年2月17日
14. 中村大, 「第5回 縄文土偶の世界 遺物に見る精神文化」, NHK文化センター名古屋教室講座「最新研究が解明する縄文時代」, 名古屋市東区・NHK名古屋放送センター, 2015年2月22日
15. 大野薫, 「縄文人の心—土偶の研究と船橋遺跡—」, 冬季企画展「河内の美・技・心—考古学研究と船橋遺跡—」講演会, 大阪府和泉市・大阪府立弥生文化博物館, 2015年2月28日

① その他

なし

以上

拠点名： 自然と人間が共存可能な新たな文明の創造に向けた「環太平洋文明学」の構築

拠点リーダー名： 高橋 学

研究開始	2013年度	2014年度	2015年度	2016年度	研究終了
拠点全体 (運営委員会で企画・運営を行う)	<ul style="list-style-type: none"> 環太平洋文明研究センターを設立 シンポジウム開催 JST社会技術研究開発の申請 	<ul style="list-style-type: none"> 環太平洋文明研究センターの展開 古気候学研究センターを設立 シンポジウム開催 科研費・新学術領域研究の申請 	<ul style="list-style-type: none"> 環太平洋文明研究センターの展開 古気候学研究センターの展開 シンポジウム開催 プロシーディングの刊行 	<ul style="list-style-type: none"> 環太平洋文明研究センターの展開 古気候学研究センターの展開 国際シンポジウム「環太平洋文明学の構築」開催 	年稿の精緻な分析から得られた情報を活用し、文明の興亡、歴史の展開を論じる新たな学問体系の創造
グループ① 環太平洋地域における人間＝環境関係の人類学的検討 リーダー名：渡辺 公三	<ul style="list-style-type: none"> レヴィ＝ストロースの神話研究の再評価と環境考古学、縄文考古学、災害地理学のつき合わせ 各自の現地調査によるデータの収集 10%	<ul style="list-style-type: none"> 各自のフィールド調査によるデータの収集および各自の到達点の共有化 25%	<ul style="list-style-type: none"> 「環太平洋文明学」の理論的枠組みの検討 各フィールドでの森里海の物質循環構造の把握にもとづく人間＝環境関係の比較検討 40%	<ul style="list-style-type: none"> 「環太平洋文明学」の理論的枠組みの構築 各フィールドでの森里海の物質循環構造の把握にもとづく人間＝環境関係の比較検討 	文明論の人類学的再構築と個別社会のスケールでの物質循環構造の解明
グループ② 環太平洋各地の年稿分析による緻密な災害史の構築 リーダー名：安田 喜憲	<ul style="list-style-type: none"> 年稿の各種分析(グアテマラの湖沼、ペルー高山の湖沼、バリ島・ブーヤン湖等の火口湖、秋田県一の目瀧や小川原湖、長野県深見池など) 40%	<ul style="list-style-type: none"> 年稿の各種分析(グアテマラの湖沼、ペルー高山の湖沼、バリ島・ブーヤン湖等の火口湖、秋田県一の目瀧や小川原湖、長野県深見池など) 55%	<ul style="list-style-type: none"> 年稿の各種分析(グアテマラの湖沼、ペルー高山の湖沼、バリ島・ブーヤン湖等の火口湖、秋田県一の目瀧や小川原湖、長野県深見池など) 65%	<ul style="list-style-type: none"> 過去の気候変動、環境変動、そして災害が環太平洋地域の文明の興亡に与えた影響の分析 	環太平洋地域の文明の興亡と環境史および災害史との相互関係の解明
グループ③ 環太平洋北部と西部の重層圏としての縄文文化と弥生文化の移行解析 リーダー名：矢野 健一	<ul style="list-style-type: none"> 遺跡・遺構・遺物の地域的なGISデータベースの試行と、その手法の検討 遺跡での調査(杉沢遺跡、葛籠尾崎湖底遺跡) 10%	<ul style="list-style-type: none"> 遺跡・遺構・遺物の時期的な変遷を可視化するGISデータベースの構築 遺跡での調査(杉沢遺跡、葛籠尾崎湖底遺跡) 25%	<ul style="list-style-type: none"> GISデータベースにもとづく縄文時代草創期の土器量の変化と気候変動の関係の分析 縄文遺跡の立地変化に災害の発生が及ぼした影響の分析 50%	<ul style="list-style-type: none"> GISデータベースにもとづく縄文時代晩期の土器量の変化と気候変動の関係の分析 縄文遺跡の立地変化に災害の発生が及ぼした影響の分析 	縄文文化の起源と終焉における文明と環境変化との相互関係の解明
グループ④ 環太平洋における地震・津波災害 リーダー名：高橋 学	<ul style="list-style-type: none"> 地震(津波・火山爆発)被害の史・資料収集および現地調査、各種地図の作成(チリ地震) 15%	<ul style="list-style-type: none"> 地震(津波・火山爆発)被害の史・資料収集および現地調査、各種地図の作成(チリ地震) 30%	<ul style="list-style-type: none"> 災害履歴の調査、災害避難地図の作成(スマトラ地震、南海トラフ地震) 60%	<ul style="list-style-type: none"> 災害履歴の調査(東北日本太平洋沖地震、日本海地震、北海道南西沖地震) 	環太平洋地域での災害発生メカニズムの解明、および災害被害のデータベース構築、防災対策の構築

目標

人類学、地理学、考古学の統合による「環太平洋文明学」の構築

目標

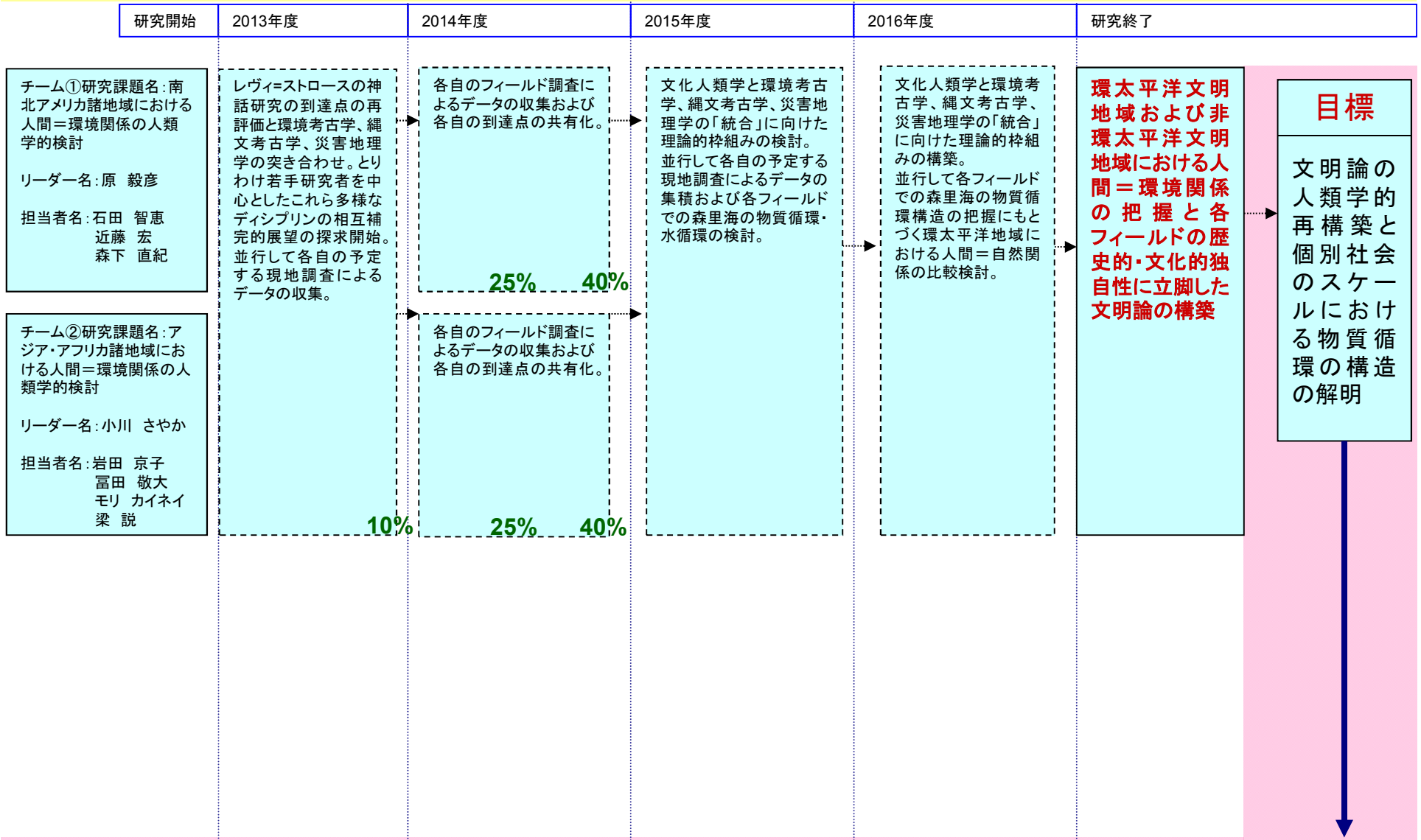
環太平洋地域における文明の興亡と気候変動・環境変動との関係の解明と将来的展望の構想

拠点の最終目標：環太平洋地域の災害と文明の興亡の相関を解明する学際的研究の世界的拠点形成

研究グループ計画書(2)

グループ研究課題名: 環太平洋地域における人間=環境関係の人類学的検討

グループNO: 1 グループリーダー名: 渡辺 公三

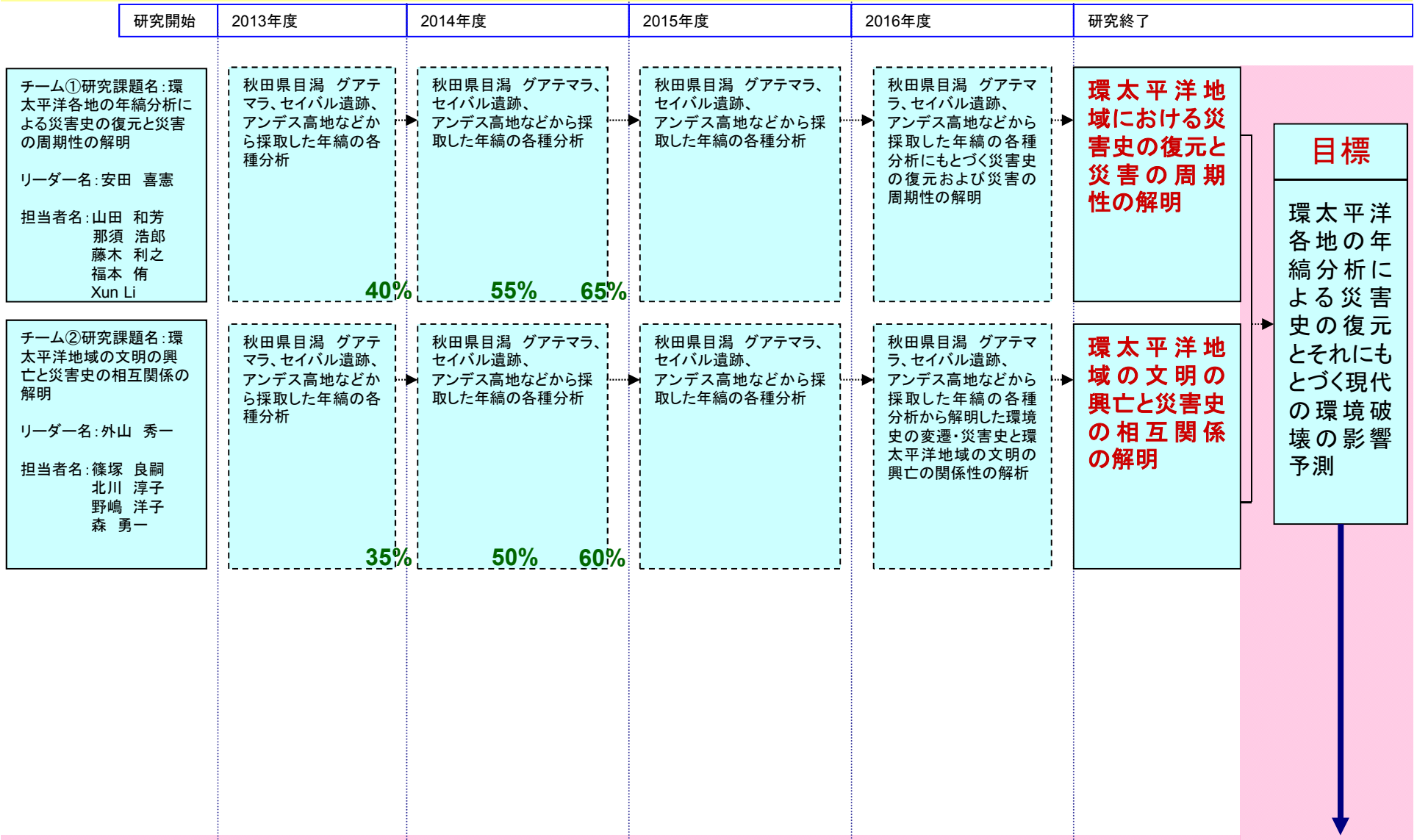


研究グループの最終目標: 文化人類学の視角から環太平洋文明研究の構築に寄与する

研究グループ計画書(2)

グループ研究課題名: 環太平洋各地の年縞分析による緻密な災害史の構築

グループNO: 2 グループリーダー名: 安田 喜憲

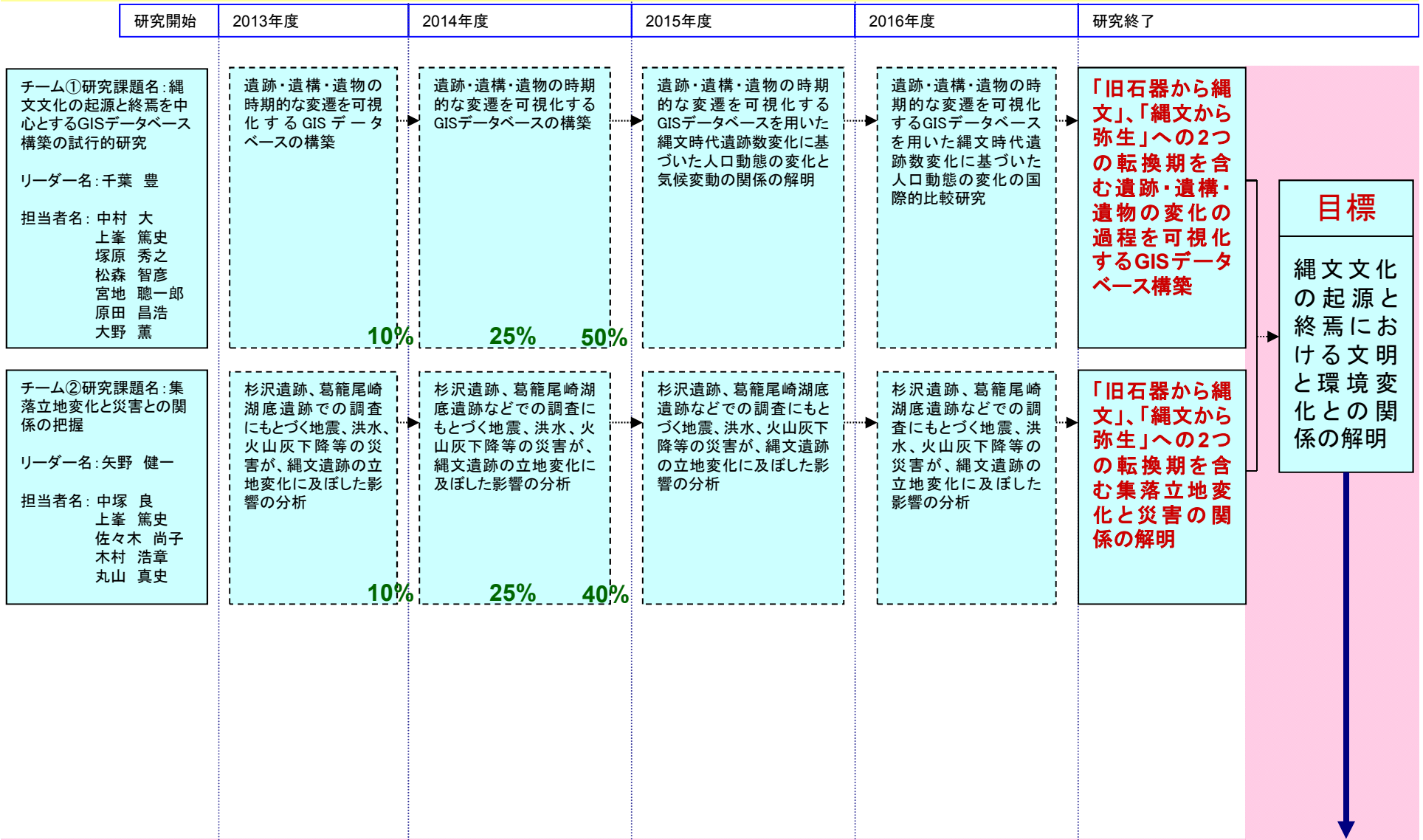


研究グループの最終目標: 環境史・災害史が文明の興亡・歴史の転換に与えた影響の解明

研究グループ計画書(2)

グループ研究課題名: 環太平洋北部と西部の重層圏としての縄文文化と弥生文化の移行解析

グループNO: 3 グループリーダー名: 矢野 健一

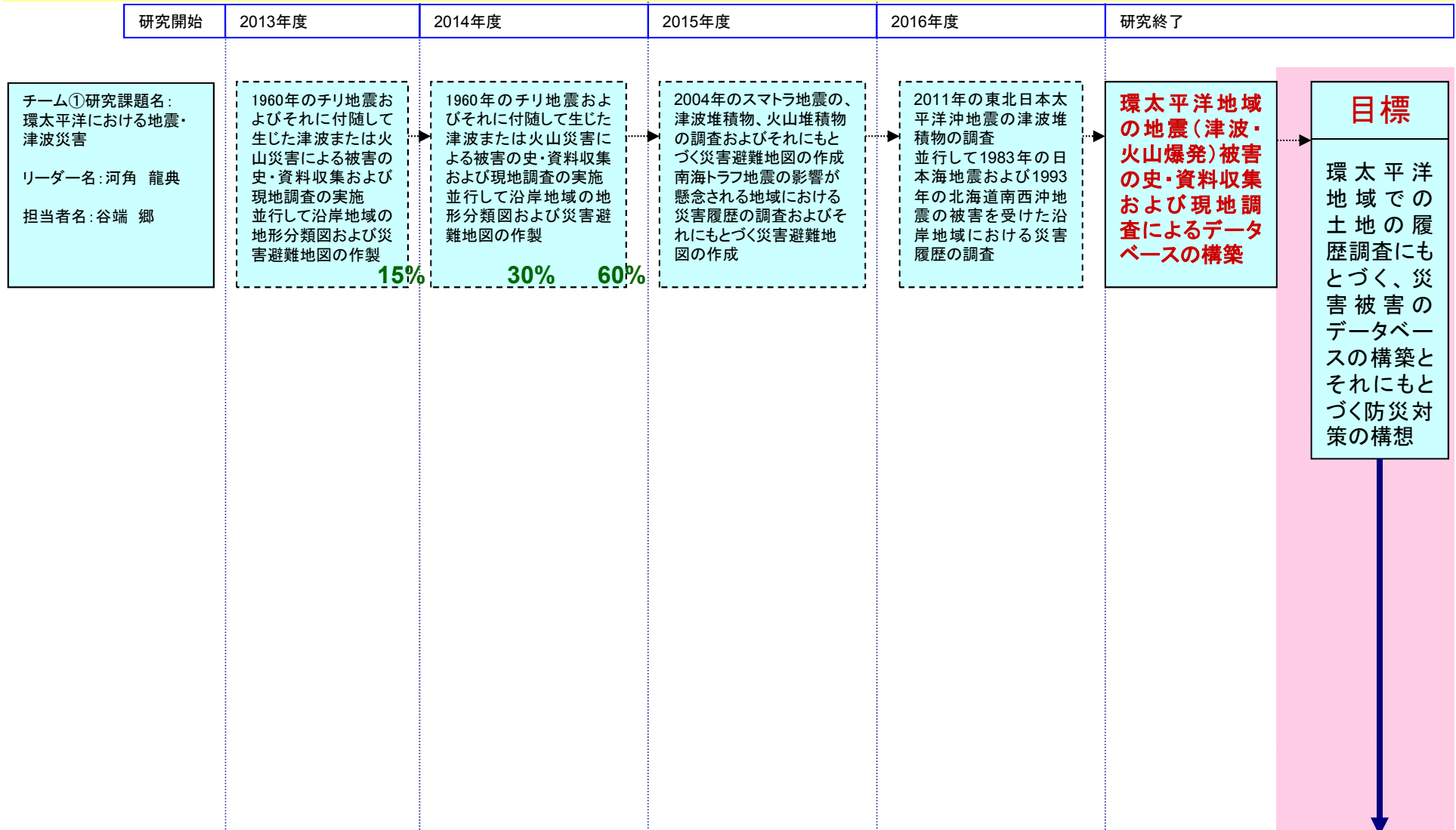


研究グループの最終目標: 環太平洋地域における災害と文明の攻防の解明

研究グループ計画書(2)

グループ研究課題名: 環太平洋における地震・津波災害

グループNO: 4 グループリーダー名: 高橋 学



研究グループの最終目標: 環太平洋地域における過去の災害メカニズムを明らかにして、次に生じるであろう巨大災害に備え準備をする